

翻訳

ジョン・モンタギュー作
『毒された土地』とその他の詩より(1)

訳：西谷 茉莉子・塩谷 直史

水運搬人 'The Water Carrier'

日に二回、学校へ行く前の朝と夕方、
泉から水を汲み、運んで帰る仕事をした。
てこの要領で、両方のバケツの重さのバランスをとったものだ。

黒イチゴが奔放に生い茂る小道は川に続いていた。
ぬめった泥をてっぺんにつけ、洗いざらされた角っこが
骨のように白くなった飛び石を、用心しながら渡った。

幅広のため池は、洗濯用と家畜用。
手を水に浸し、弧を描きながら、バケツを
少し錆っばい水で満たすと、小さな魚がちらっと動いた。

二つ目の、そう、琺瑯のバケツは、湧き水を汲むためのもの。
イグサの茂った原っぱを駆けてきた水は、
錆びで薄く脆くなって、壊れた排出パイプのせいで、

ぶくぶくと泡立って出てきた。
流水は透明で冷たく、

氷の手かせのように手首の上に落ちた。

バケツの縁が満たされるまで、
摘み取られていない野イチゴのじっとりとした匂い、
水辺で滋養された、あの鬱蒼とした緑を深く吸い込み、立っていた。

その場面を再現した時、エジプトの水運搬人のポートレイトのような、
ひとつの様式を作り上げたいと願っていた。
でも、何気ない日々の記憶に心奪われた今、やめにしよう。

私は今でも、そこに水を汲みにやってくることがある。
戻るためでも逃げ込むためでもない。混じりけのない何か、
生きている源、半ば想像で半ば本当のもの、

想像上の水の中で鼓動を感じるために。

哀れな老女 ‘The Sean Bhean Bhocht’

子供の頃、婆さんはおっかなかった。
農家の炉辺で、せっせとお椀にお茶を淹れ、
ぼろきれと肩掛けできあがった繭にくるまったまま
「彼に神のご慈悲がありますように」
‘Go ndeanaidh Dia trocaire ar a anam’
と体を揺り動かしながら、低い声で節をつけて歌っていた。
うす汚れた梁の下で、人形の頭が口をぱくぱく動かしているみたいだった。

「アイルランドの妖精たちとスコットランドの妖精たちが
あの丘で一晩中闘い
朝になると井戸から血が湧き出ていたんだ。
亡くなった女王はあの丘に埋葬されたのさ。
その塚に通りがかられたパトリックさまは、
足を止めてお祈りをなされた。

その足跡はいつまでもそこに残っていたんだとさ」

民族の記憶のために目を潤ませつつ、
お茶に浸したパンのかけらを
やせた歯茎の間でかみくだいでいた。
その服は夏の亜麻みたいな匂いがした。
記憶と祈りの間を揺れ動きながら
死へと向かっていく彼女のことを
質素なおもちゃ箱のような家の中で、農家の子供が見守っていた。

「マクガレンの奥さんは邪視の持ち主で
黒い牛にお祈りをすると
その牛はその場で倒れて死んでしまったんだ。
轡に倒れこんで死んじまったのさ。
彼女が境界に立って、クラークさん家を呪ったら
その後一家はいい目を見ることはなかった。
家畜には虫がつくわ、ろくな作物は出来ないわ、おかしな子供が生まれるわ、で」

調子のいい時には、地元の歴史がどっさり盛り込まれた
擦り切れたレコードみたいだったが、
今はただ針が盤をひっかくだけ、息も途切れ途切れで、
苦しそうに預言を吐く老いぼれだ。
齢を重ねたって知識も権威もありゃしないのに
そのくせどちらも自分のものだと言い張る。
死に抗って、長々と伝説を紡ぎだしながら。

それでも夏の盛り、玉蜀黍が燃え立つような丘を
私は黄金の日の光を浴びながら、
不思議な螺旋模様のついた墓石のところまで歩いて行った。
草ぼうぼうの井戸には赤いものがちよろちよろしていたけれど
血ではなくただの鉄錆だった。
そうしたら守護石の渦巻き模様の下には

どんな妖精の女王が塵をかぶっているんだろう？

往診 'Sick Call'

シェイマスへ

萱茸き家のまぐわの下に
医師が姿を消し
トラクターの下敷きになった
農夫を治療しにいった時
私はふさぎこんだように雪の中を
行ったり来たりしていた、

向きを変えるたび自分が残した足跡が埋もれていくのを
目の当たりにしながら。
犬が吠える声に振り返ると
目に見えるのは
灰色がかった、吹雪が渦巻く天空の器を背に、
孤立した真黒な木々。

長方形の光の中から
患者の妻が私に呼びかける。
ひそひそ声で、(雑種の犬が彼女のエプロンのところでクンクン鳴いているままで)
夫が「重態である」ことが
いかにつらいのか、
打ち明けようとして。

私の兄の車が、がたごとと
轍のついた小道を進んでいくと
粉のような雪が舞い上がった。
犬がまた吠え始め
車輪めがけて突進しては

また安全な場所に戻っていった。

ミルクのひと飲み ‘A Drink of Milk’

牛小屋の梁の渡された
暗闇の中で、牛たちが動く。
温まったエンジンは、音が立たないように
待機モードにされている。

その後、搾乳のために、スイッチが
パチンと下ろされる。
コンクリートの間仕切りの中で、
牛たちは鎖をガランガランといわせる。

農家の手がゴム製の
触手を緩めると、
それは牛たちの膨れた乳首を
軽やかに、リズムカルに引っ張る。

そして、人の手に触れられないまま、
脈打つ流れが
搾乳機の青色のシリンダーを
しっかりと上っていく。

雌猫だけが、そっと
縁の欠けた平皿へと忍び寄り、
昔からの定番の飲み物に
レーダーのひげを浸す。

そして、静まり返った夜のキッチンで
ブーツを蹴って脱ごうとかがみこむ前、
ションは、泡立った

マグカップを持ってきて、

所狭しと並べられた食器類の棚の下、
サイドボードの上にそれを置く。
トランジスターラジオは、叩きつけるような音で
棚に置かれたマリア像を揺らす。

その間、彼は、夢うつつでベッドへと向かう。
最後に少し雑誌に目をやり
マグを顔に近づけると、
軽く唸り声をあげ、きれいに飲みほす。

マンチェスターのマーフィー ‘Murphy in Manchester’

船とカモメが入り混じった夢から醒めると
生々しいむきだしの現在が
突然、揺れる座席に座っている彼の方へと漂ってくる。
最初の一日はずっと
通りをとぼとぼ歩いて、知り合いを訪ね歩き、
工場主たちやサーベルをつけた大将たちの記念碑を
ぼかんと口を開けて見ている。
果物も一緒に並べている
野菜売りの露台を通りかかるとはたと立ち止まって
節くれだった一個のジャガイモをしげしげと見つめる。

食堂での昼ごはんの時
彼は自分の手と足が大きくなって、
まるで慣れない土地のように感じているのに気づく。
大都会は、暗闇であり、喧噪であり、
その中を輝かんばかりの少女たちが立ち動いている。
まるで他の子どもが持っているぴかぴかのおもちゃみたいに。
じきに号令の笛を鳴らす工場が

彼を閉じ込めてしまうだろう。
呼び起こされかけた記憶と悔恨を
工場の鉄の轟音でかき消して。

王の訪れ 'A Royal Visit'

タラ、今は荒地なれど、
かつての英雄たちの住処…
『レンスターの書』より

1

私たちが土塁を目指して歩く間、
鳩の深みある鳴き声は
何かをしきりに訴えようと
妙なる魅惑の音を奏でる。
知識人たちの斧頭は、サンザシの芳香が漂う中へ、
夏の朝に最も主張する色の中へと
洗い清められていく。

2

このような、贅を尽くされた塚には、
たやすく近づけるものではないが、
それは儀式的な武勇伝を通じて、
戦と愛の甲高い音を絶え間なく鳴り響かせている。
姦通した乙女たちと、空に向かって
拳を振り上げる戦士たちが
季節が巡るたびに行われる磔刑を願う。

3

ゲール人のアクロポリス、いや、煤けたあばら家か。
柳でできた広大な大広間では、
ほろ酔いの吟遊詩人たちが

家系の誉れをとめどなく語る。
詩の荘重な母音韻は
一族の回廊に並んだ
狼の毛皮を着た戦士たちを硬直させる。

4

もう少し細やかな歌、抑制のきいた
鳩の歌声を望む者は、
愛の石の寝床の上に鳴り続ける
愛欲が引き起こした恐怖の物語を求める。
死をもたらす猪が、せむしの山の下で
猛突進する時に至るまで、
恋人たちと風景は混じり合う。

5

奇跡同士の闘争が
キリストの統治を立証し、
ドルイドの雪が
慈悲深いキリストの雨へと変わっていく。
キリストの方が偉大な魔術師なのだ。
儀式において、もはや陽石が、
王に向けて絶叫することはない。

6

憂いに満ちた聖パトリックは
この地に宿る荘厳さを眺望する。
彼に見えるものは、5つの王家の道が
どこまでも彼方へと続いていた時代に
身体を引き攀らせた歩哨が見たものと変わらない。
それは、ミーズの中枢地が、
高貴な青色の平面へ霧散していく様。

古い言い伝え ‘Old Mythologies’

そしていまや、ついに誇るべき功を遂げてしまい、
彼らは口を塵で塞がれ、闇を抱きしめ
骨壺のように地中にしかるべく並べられている。
春の草をむしゃむしゃ食べている牛たち——
シャムロックや四葉のクローバーを貪り食う美食家たち——は
英雄たちがそろいもそろって、
殺戮に明け暮れた日々の悔恨とともに寝返りを打つ時、
古い武器たちが泣き声を上げるのを耳にする。
この峡谷は英雄たちの古の熱狂を揺り籠であやしている
かつて、この上なく叙事詩にふさわしい朝に
彼らの野蛮な足取りを支えた時のように。
バグパイプを吹き鳴らしながらの行軍に、
モデルのように痩せたウルフハウンドが
その早足に遅れまいとついていった。

修行生活への注釈：ディングル半島 ‘A Footnote on Monasticism: Dingle Peninsula’

驚くことに、今でもいくつかの場所では
そういうもの出くわすことがある。海辺に置かれた
古い麦わら帽子のように、風雨にさらされながらも
十二世紀も生き延びている。ここにある塚は
屋根が崩れ落ちたもので、
もとの形の輪郭を思い描くこともできない。
またそんなことは大したこともない。というのも
この岩だらけの海岸にあるどの荒地にも
そんな小屋や洞窟の荒れ果てた集落の中に
激しい迫害を受けた隠者たちが、
カモメと岩と、傍で波が唱える途切れることのない祈りの中に
避難する場所を見出したという、より多くの形跡がとどめられているのだから。

翳りゆく岩場で隠者は祈った。
肉体は鍛錬されても不条理なもので
大地の方へ引き留める力が働く場では
鳥のように、彼の魂もまごつくばかりだった。
祈りのためだけにある両の手は、
高く差し上げられた杯のように、
音をたてることもない完璧な使者たちに
夜ごと自身を捧げていた。

たしかに、仲良く集う人々を窓越しに眺めながら、
あるいは古い書物の頁を繰りながら、その中に
加わろうと願い、新しい流行の宗派を
夢にとっても夢見る人たちにとっても
好ましいこのケルト海のほとりで創始したいと
願うこともあったかもしれない。女性の隠者たちの愛は
ただただ利己的で、岩に対して囁くしかないほど
重大な事情を抱えていた。
夜を徹しての祈祷と断食を定め通りに繰り返し
肉体という頑固な館を打ち壊すことで
口の中に、霊が動くように、
オランダガラスがそよぐようになるのだ。

孤立していて、祝福を受けることもない、
終わることのない魂の行によって、
ついには、鎮められた五感が、
客人の到来を告げるのだ。
最後の荒野となる
内なる岩場と外なる岩場で
心という頑なな岩から
ついには浄化する水がほとぼしり出るのだ。

ある南海岸での独り言 ‘Soliloquy on a Southern Strand’

シドニー郊外の海岸で休暇中の司祭が、アイルランドで過ごした少年時代のことに思いを巡らせている。

小さい頃、物事はずっとシンプルだった。
私は、神様がそこらの丘の上に立っているのを見た。
彼の目は穏やかで、柔らかな羽毛の鳥たちが
彼の声に合わせてコーラスを歌っていた。
すると、私の体は震えだし、服従の熱を帯びた。
托鉢修道士が静修のため、年に一度説教に
やって来て、蠟燭のゆらめく炎に囲まれ、叫んだ。
「ああ、子供たちよ、お前たちがわかってくれさえすれば。
ほんの僅かな行きさえ数のうち。お前たちのあらゆる行いが、
あのお方の五つの傷を、疼かせたり癒したりするのだ！」
しゃがれた抑揚のない声をした司祭は、
茶色の袈裟の両袖を掲げて叫んだ。
「この蠟燭の燃えさしのように、肉体は燃え尽きて死ぬ！」
そうして、私達皆を悔悛と歓喜へと導いた。

その説教者が話すのを聞いて、私は自分の心を知り、
神に仕えたいと願った。そこで慣れ親しんだ農場を去り、
神学校で数年を過ごした。初めのうちは生活に慣れず、
私よりすべすべした手と滑らかな声の同級生たちを恐れた。
夜には、横になっても目は冴え、家に帰りたいたいと切に願った。
物陰で、町の少年たちが、私を恥で真っ赤に
するようなことで笑うのを聞いた。
そして、願掛けの蠟燭が蠟に変わるまで囁く場所で、
おずおずと、私は心にしまっていた疑いを口に出し
あなたの御名においてあらゆる情欲に打ち勝った。
私は、変化のない年月を切り抜け、
ついには聖堂の説教台の前に立った。

無骨な田舎出身の少年、しかし新米の司祭として。
母は喜び、穏やかにそれを眺めた。

今、若者たちが、シドニーから海岸に集まっている。
レミングのように、海へと殺到している。
熱が、ぎらぎらと照り付けるごった返した浜辺で戯れ、
私の、打ち付けられた頭と膝を鋳型に鋳抜くかのよう。
新しい車が何台もやって来ては、鳥のように降り立って、
砂ぼこりを巻き上げ、地面を切り刻んでいく。砂に
固定されたラジオは、恋の病を歌った歌をビリビリと鳴らし、
女の子たちは手荒に扱われ、太陽の中をくるくる回る
ビーチボールの的となって追いかけられる。
ここでは、私の俗世離れた衣が何の役に立とうか。
私のしらふの自己が何の役に立とうか。
彼らが演じる快樂的な芝居とは正反対のものを意味するというのに。
「熱い唇、熱い唇」としゃがれ声の歌手がため息をつく。
若い男が高所で身づくろいをして飛び込む。

これが一人の男にふさわしい結末だということか？
太平洋の波が、浜辺に押しよせては崩れ、
うねり、高まり、浜辺の上へと内側から広がる。
今は12月、暖かい。
だが私の血は冷たく、私の肩は弛緩している。
徐々に服従した私は、拷問台にいるかのように、
体を太陽の方へと向け、
心地よさに耐える。夢の中で、
私は、黄金のチェスのコマのように、刈り束が積まれた山の間で、
カッコウが踊りながら二全音符を歌うのを聞く。
その鳴き声ひとつひとつがその間に、ある時代、ある大陸を呼び起こす。
殉教もなく、奇跡もなく、特権の喪失もない。
こんな生ぬるい結末のために、
私はこれまで、十字架を背負ってきたのだろうか。

カリフォルニア、1956

狂える司祭のための哀歌 'Dirge of the Mad Priest'

神は壁に掛けられた、ひび割れた鏡の中からご覧になっている。
神はのぞき魔でもあり、猫のようにこっそりとあらゆるものをご照覧になる。
種馬が勢いよく後ろ足で立つような時には、神がその馬を駆っておられるのだ、
黒いあごひげをたくわえ、壁のように真っ直ぐに背を伸ばして。
私が髭を剃る時に、手や頬を傷つけても
流れ出る血は神のものであり、かすかにでも神の贖いから
私を守ってくれるものなどありはしない。
私の神は、畏怖の念を催させる文字として、壁に掛かっている。

通りを歩くと若い娘たちが大声を上げる。
軽やかなスカートをたくし上げて叫ぶ。
クロウタドリは桜桃の木の上からあざけて
翼を広げながら叫ぶ。
「黒い服を着た、不様な、不様な男よ、
お前が背負っているそのロバの十字架はなんだ。
若い娘たちがスカートをたくし上げて声を上げているというのに。
ああ、日の光の下で黒い服を身にまとった陰鬱な男よ！」

また春が来て、鱒も丸々と太り、
鬱血が流れ出るように、若枝が萌え出て、
ミサには、きちんとした身なりの人たちが大勢集う。
山中で嘆息まじりの銃の撃鉄を起こす音がひびくと
私が手に持っている鏡にもひびがはいり、
血が流れ出した。私の手も血まみれになり、
ついには午後三時の、私の頭上の空に
燃え盛る太陽が血まみれになって下りてきた。

平和の時の修辭的な瞑想 ‘Rhetorical Meditations in Time of Peace’

1. アイルランドの理想的な選挙のための演説 ‘Speech for an Ideal Irish Election’

その昔、幻想の女は
アイルランドの緑の地を
魔術師の娘のように歩いた。
政治家の言葉の
幅広の輝く剣は、
各地の街角で拍手喝采を求めた。

井戸に、原っぱの隅に、
見えない存在が住んでいた。
家並みは、愛国者たちの記憶によって
魔法の光を帯びた。
人々は畏れをなし、揺れ動く木に宿る
超自然の存在の前に膝まずいた。

その実体のない光は
横顔、銃、語句をより大きく見せた。
草地の緑は
触媒者の印として肩に羽織られた。
ライフルと銃の辛辣なスピーチは、
人の神経をなだめすかして、決然とした行動を取らせる。

その家は静まりかえり、
埋められた爆弾は鋤のことなど気に留めない。
宵の光は、それらしく重厚で、
新たにされようとする動きに挑んでいる。
英雄たちは姿を変え、
彫像の灰色の均斉を備えている。

今や、異様なほど静寂の時、
制限の時である。
柔らかい草が揺れているところで、
いまだ終わることのない夢が
あの遠く離れた岩窟の中、
フィアナ騎士団とともに埋められている。

銃口の煙が吹き消された今——
その場しのぎで、威厳がなく、
反英雄的なものごとと闘う以上のことを
求めるものはいるだろうか。
あるいは、緩慢になっていく潮流に逆らって泳ぐという
あと少しばかりは偉大な務めを果たす以上のことを。

2. カレドン城 ‘Caledon Castle’

それは、初めて垣間見た富だった。
広々とした窓をした館の前で、
孔雀たちの列が、芝生の上を散開していた。
私は5歳で、大きな手を握っていた。
目を見張るような見事な鳥たちが、尾を扇のように
広げている様子を目を見張りながら。
色づいた木々の下では鹿が草を食み、
壁の下では孔雀たちがさまよい、
窓の下では石造りの噴水が噴き上げていた。
死を定められ、儀礼に満ちた、富の舞踊の中で。

3. スラム街一掃 ‘Slum Clearance’

窓際に立ち、私は、奔放に茂った緑の葉っぱが
壁に向かってよろめき、りんごの木が風の中で
枝を隅々までぴんと伸ばし、雨が叩きつけるのを見ている。

夕方の間、人の手で建てられた陰気な建物
黒ずんだガラクタの山、
粗野な造りのアパート、俄かごしらえの壁の
水のにじみ出てきた灰色のセメント、
鋭く笑い声をあげながら雨宿りの場を移して走り回る
日光不足で青白い顔をした子供たちに、雨が叩きつけるのを。
そして、無関心な雨が、感覚を麻痺させながら、全てを覆い尽くすのを。

4. 移民たち ‘Emigrants’

悲しげな顔を手すりに押し付け、
ぎこちない手でスーツケースを握りしめ、
彼らは栈橋に詰めかける。
誰だって、彼らが光り輝く聖杯、
偉大なる理想の地を探求しに行くとは思わないだろう。
その顔には不可解さが色濃く出ている。
彼らの悲しみは、動物のように、もっとも哀れで、
散文にしても詩にしても、惨めな主題。

5. 平和の時の呪文 ‘Incantation in Time of Peace’

時折、この島で、ヨーロッパの隔絶された辺境で、
祈りと銜いとが花咲く最後の花園で、
河が、動きを止めることのない海へ悠然と流れ込み
織り成されたヴェールのような雨が岬や眠たげな平原の上に移ろう
修道士たちと静謐な詩のための緑の聖域で、
時折、この島で、晴れたり降ったりの循環のなかで
日がな夢を見ながら
凶兆が重なっていくに従って、
歴史という、網目のようにつながった瀬である
塩類平原から陸に上がってくる恐竜のような
大きな災いを、われわれは怖れる。

理由もよく分からないまま、手を震わせて。

時折、われわれは、海によって、また自ら選び取ることによって
人々の恐れと怯えから切り離された、この最後の間に合わせの磐で
日々のゆるやかな移ろいを見つめ、
三位一体の世界の、慈愛に満ちた独占的な加護につながる
絆が断ち切られたというあらゆる徴候を認める。
その世界は、われわれの危急の時にもわれ関せず、と
はるかかなたの、鎧戸を立てて守られた、恩寵に満ちた山々の、
平和など空気のように当たり前で、賛美が若い草を食む、
もっと祝福された地にあるように思える。
彼の地では、隠遁したわれわれの祖先たちが、安息を得ていいにもかかわらず
途切れることなく瞑想の祈りを捧げながら
暗い岩場で膝まずいている。

時折、われわれは、よくある弱さや身震いから
立ちのぼる香と、じめじめしてみすぼらしい住まいや聖なる山に降りそそぐ
優しい光から顔を背けることがある。
その手で怖れるものたち、追放されたものたち、苦しめるものたち
を助けようと祈っているながら、身内の諍いを無事におさめることや、
率直に許しあうことから顔を背けることもある。
必要なのは、分かち合うことであるということは、
空を飛ぶ鳩のような環をつけた手首から脈を打っている
掌を広げれば、そこに示されているのだ。
そしてわれわれは、さらに不吉な日の予兆として雲が湧き立つと、
このような背景を持っているかぎり、
心からの願いも甲斐のないことだと思い知らされもするのだ。

1953年

テキストについて

本訳稿は、*New Collected Poems* (Ed. Peter Fallon, Gallery Press 2012) に、‘from *Poisoned Lands*

and Other Poems (1961, 1977)’と題して収められたテキストを基にしている。*Poisoned Lands and Other Poems* (1961) は、処女詩集 *Forms of Exile* (1958) 所収の作品のいくつかに新たな作品を加えて再編成された、Montague の第2詩集である。その後、*Poisoned Lands* (1977), *Selected Poems* (1982), *Collected Poems* (1995) を経て、作品の順番は大幅に変えられ、削除や追加、改訂が重ねられた。

解題

水運搬人 ‘The Water Carrier’

詩人の幼年期の体験に基づいた作品であると思われる。1929年、アメリカに移住したカトリック系アイルランド人の両親の元、ニューヨークのブルックリンに生まれた Montague は、1933年には親元を離れ、北アイルランドのティローン州の農場で未婚のおばたちと暮らした。この詩の中の澄んだ湧き水の入ったバケツと、錆っぽい水の入ったもう一つのバケツの間でバランスを保つ姿は、彼の詩人としてのあり方を象徴的に示すものである。

最終行の「想像上の水の中で鼓動を感じる」(“Pulses in the fictive water that I feel”) については幅広い解釈がなされてきた。Justin Quinn は水、そしてあらゆる経験は fictive な創り出されたものであり、掴もうとしても掴みきれないものである、ということの意味しているとし、Richard Bizot は記憶こそが fictive water であり、汲み出すべき源泉であると述べている。また James D. Brophy は、語り手が感じ取っている詩的エネルギーと生の鼓動は、自身のアイルランドでの少年時代を意図的に回想し、過去によって現在を意味づけるという創造的行為の結果だとしている。Montague 自身は、自作を朗読した CD である *The Northern Muse* のライナーノーツの中で、「水運搬人」のような詩は、子供の頃の典型的な経験を、偽りのノスタルジアなしに、もう田舎の生活に戻ることは不可能な20世紀の成人としての人生に変容させる試みである、と述べている。

衰れた老女 ‘The Sean Bhean Bhocht’

1956年に発表されたこの作品は、詩人がアイルランドの伝統を題材として取り扱おうとした最初期の作品の一つである。この詩に登場する老婆は、Cathleen ni Houlihan のようにアイルランドの歴史を自分自身が体現する、あるいはその物語を語り継ぐ語り部であり、アイルランド文学にはなじみ深い人物像でもある。詩人自身が、1961年版の *Poisoned Lands and Other Poems* に付けた注には、「*The Sean Bhean Vocht* (sic) はアイルランドの伝統的な象徴の一つで、同名の18世紀の愛国的な歌でもっとも親しまれている。第1連のアイルランド語の語句は R.

I. P. とほぼ同義である。私の子供の頃は北アイルランドの辺鄙な地域にはまだゲール文化を留めている地域が残っていた」とある。(ゲール語の一文“*Go ndeanaidh Dia trocaire ar a anam*”は「彼に神のご慈悲がありますように」「*Lord have mercy on his soul*」という意味で、これは会話の中で死者のことを話題にした後に添える言葉である)ただしこの注は後の版では削除されている。

少年は、老婆をおっかない、それほど高貴さを感じられない存在として見ていながらも、老婆の語る物語にまつわる場所を訪れてみる。期待していた通りのものを目にすることができなかった少年がその後どうなっていくのかについては、曖昧な点が残されているが、Montague 自身も安易に、既成の、やや偏狭なアイルランド観に立つことからは、少し距離を置こうとしたと言っている。

往診 ‘Sick Call’

この詩が猥じられている Seamus とは詩人の兄を指している。1933年に兄弟がアメリカからアイルランドに戻されたとき、John は父方のおばに、二人の兄は母方の祖母のもとに預けられ、別々に育った。詩人が医師である兄に付き添って、国境を越えてドネゴールまで悪路と吹雪をおして診療に赴いた時の経験は、後年 8 篇の詩からなる連作 *Border Sick Call* (1995) の題材ともなっている。

ミルクのひと飲み ‘A Drink of Milk’

この作品に出てくるほぼ完全に機械化された酪農家は、伝統的・牧歌的な農家像をひっくり返したものであると同時に、ところどころ不完全なバラッド韻を基調にすることで、そのような牧歌的な農家像を提示してきた文学作品に対する皮肉でもあるように思える。牛に手を触れることもなく、機械を操作することで搾乳作業をしている Sean の農場には、牛と猫以外には誰もいない。気晴らしになるのは、トランジスタ・ラジオから流れる音楽と雑誌だけだ。ただ仕事の終わりに、いっぱいミルクを飲み干すことだけは、伝統的な酪農家と変わらないのかもしれない。

マンチェスターのマーフィー ‘Murphy in Manchester’

1960年11月に雑誌 *Poetry* に掲載されたのち、詩集 *Forms of Exiles* に収められる。職を求めてアイルランドからイギリスに移り住む労働者は少なくなく、マンチェスターも昔からアイルランドとの結びつきが強い地域であるとされる。農業関係の労働者は短期間の出稼ぎであることもあったが、工場労働者は長期にわたって勤務することが一般的であった。この詩は初出形

では、10行目の後に「愛にも似た興奮とともに」(“With excitement akin to love”)という一行が添えられていた。ジャガイモはアイルランド人にとって特別重要な作物であるため、物言わぬ Murphy が都会で見かけたジャガイモに示す特別な愛着は、故郷であるアイルランドそのものに対する愛着でもあるのかもしれない。彼は街中でいくつかの軍人や商人の像を目にするが、それらには深い関心を寄せているようには見受けられない。それらの偉人たちの業績や仕事、それこそ彼自身のような名もないアイルランド人の職工たち、兵卒たちの献身、時には犠牲によって成り立っていたことに思いは及んでいただろうか。

王の訪れ ‘A Royal Visit’

冒頭の『レンスターの書』(*Book of Leinster*)とは、12世紀頃、修道院にて編纂された写本。中世のアイルランド文学や神話が扱われている。古代のアイルランドは、レンスター、マンスター、アルスター、コノート、ミーズの5つの王国から成っており、ミーズ (Meath) は現在のレンスター地方の一部にあたる。この地にあるタラの丘は、古代アイルランドの伝説において、王が戴冠する主要な場所であり、アイルランドの上王の居住地でもあった。現在でも、ミーズ州によく“royal”という語が結び付けられる所以である。「陽石」(the phallic stone) はタラの丘にあって、王を認定したとされる石。また、このタラにおいて、聖パトリック (St Patrick, 387?-461) は、アイルランドにキリスト教を布教することを認められた。このタイトルは英国王・女王の行幸をまず想起させるのであるが、この地に割拠した諸王や聖人以上に、royal な資質を宿しているのはこの土地そのものであるとも考えられないだろうか。「死をもたらす猪」(the boar of death) は、アイルランドの伝説に頻出する耳と尾のない猪。ブルベン山の麓でフィニア騎士団のデイルムッドに突撃して瀕死の状態にさせた猪がよく知られている。

古い言い伝え ‘Old Mythologies’

アイルランドには数々の神話群が残っており、多くの作家や詩人が、英雄たちにまつわる伝承を素材とした作品を残しているが、この14行詩は、そのような先行作品とは趣を異にしている。亡くなった英雄たちが地中の“dormitory” (語源はラテン語の *dormitorium* 「寝室」であるが、集団での共同の寝室を指す) の中で、戦場にいた頃のことを思い出しながら、悔恨に駆られて寝返りをうっている一方で、地上では英雄たちのことなど知らない牛たちが春の草を食べている。5行目に用いられている“Epicures”はもちろんエピクロスに起源を持つ語であるが、かつてアイルランドの人々の間でシャムロック (shamrock) が食用にされていたという俗説 (例えば Edmund Spenser もアイルランドでは戦争の後の困窮状態をしのぐために人々がシャムロックを食べていたと書いている) を踏まえれば、牛たちを美食家と呼ぶことも理解しやすく

なるだろう。

前述の *The Northern Muse* のライナーノーツでは、この詩は *Black Pig's Pyke* に埋まっている英雄たちを悼むとともに、アイルランドの中で起こっている争いの終結をささやかながら予言するものだと書いている。

修行生活への注釈：ディングル半島 ‘A Footnote on Monasticism: Dingle Peninsula’

ディングル半島は、アイルランド南西部のケリー州にあり、先史時代や中世からの遺跡が残っている。“Beehive Huts” と呼ばれる石造の小屋は、修道僧の修業の場となっていたと考えられている。この詩は *Forms of Exile* に収められた作品であり、何も持たず、愛する人もいない、孤独な隠者 (hermit) たちもまた追放されたもの (exile) なのである。遺跡から修行者たちが行っていた苦行に思いを巡らせる語り手からは、彼らに対する深い共感が感じとられる。第3連の終わりに出てくるオランダガラシ (watercress) は聖人や隠者が口にすることができる食物の一つであったと言われている。

ある南海岸での独り言 ‘Soliloquy on a Southern Strand’

1958年にドルメンプレスから出版された *Forms of Exile* 所収の作品である。場面設定はシドニーであるが、詩の最後には“California, 1956”と記されている。1953年フルブライト奨学生としてアメリカに渡った Montague は、イェール大学滞在を経て、1955年よりカリフォルニア大学バークレー校の大学院に在籍していた。カッコウの鳴き声が呼び起こす「ある大陸」(a continent) とは、アメリカのことであろうか。この詩のもうひとつのアメリカの痕跡はジャズであり、「熱い唇」(Hot Lips) は、ポール・ホワイトマン楽団のヒット曲 ‘When He Plays Jazz He’s Got—Hot Lips’ の歌詞と考えられる。歌詞のコラスには、カッコウが登場する。

興味深いことに、1961年版の *Poisoned Lands and Other Poems* では、冒頭の「アイルランドで過ごした少年時代のことに思いを巡らせている」の部分に“nostalgically”という一語が加えられているほか、現行の1連目と2連目の間にもう一つの連が存在している。その連にはアイルランドにいる妹から送られてきた近況(寒さのため不作であること、母が彼 (Michael) の手紙と髪の毛を大切に保管していることなど)を伝える手紙の内容が示されている。この形でこの詩を読むと、彼がビーチで若者たちに囲まれながら感じる無力感の根底にはアイルランドという故郷を喪失したことがあるのかもしれないと思えてくる。

狂える司祭のための哀歌 ‘Dirge of the Mad Priest’

Forms of Exile では巻頭を飾った詩である。“dirge”というのは葬送の際の詩のことであり、

“elegy”よりは短いのが通例である。Christina Rossetti の ‘Dirge’ のように亡くなった相手に呼びかけるものや、Sir Philip Sydney の ‘Ring Out Your Bells’ のように葬儀に集まった会衆に向けて呼びかけるものなどがあるが、追悼される本人が一人称で語るこの詩はやや異色と言ってい

いだろう。
「ロバの十字架」とはロバの背中に見られる十字架のような模様を指す。ロバがイエスをエルサレムに運んだことにより、その忠実さに報いてこの印を与えられた、などさまざまな伝説がある。1行目と21行目の「ひび割れた “cracked”」（20行目には銃の撃鉄を起こす音として “crack” が用いられている）は、“crazy” “insane” と同じ意味を持つ。

平和の時の修辭的な瞑想 ‘Rhetorical Meditations in Time of Peace’

もともこの連作詩には ‘The Sheltered Edge’ というタイトルが付けられており、作品の数や順序には何度か変更があったが、後に詩人によって現在の形に改められた。言うまでもなく、W.B.Yeats が内戦の時代に書いた ‘Meditations in Time of Civil War’ を下敷きにした作品であるが、Yeats が戦乱の時代にあって古き良きアイルランドの文化を高く評価し、その高貴な文化がしかるべき者たちに継承されずに消滅していくことに危機感を抱いていたのに対して、戦争状態を脱した平和な時代にあって未来に不吉な影を投げかける社会問題に目を向ける Montague に、John Goodby や Terence Brown などむしろ W.H.Auden の影響を認めているようである。

1. アイルランドの理想的な選挙のための演説 ‘Speech for an Ideal Irish Election’

冒頭に出てくる visionary でもある女性は、前述の国難の時に姿を現す、アイルランドそのものの象徴でもある Cathleen Ni Houlihan を思わせる。フィアナ騎士団 (Fianna) は、伝説的な英雄フィン・マクールの率いる名高い戦士団。独立運動の渦中にあったアイルランドでは、英雄や政治家や超自然の存在感が強力であったが、現在のアイルランドは沈静化し、停滞している。

2. カレドン城 ‘Caledon Castle’

カレドン城は、北アイルランドのティローン州にある城で、1779年に James Alexander (Caledon 伯爵 1世) の邸宅として建てられた。孔雀や噴水といった富豪の庭の描写は、Yeats の ‘Meditations in Time of Civil War’ I を思わせる。1961年版 *Poisoned Lands and Other Poems* ではこの詩は連作の中に含まれていない。

3. スラム街一掃 ‘Slum Clearance’

とくにダブリンなどにおいて、スラム問題は20世紀初頭から大きな議論となっていた。アイルランドが独立国家となることで、問題の解決につながるという国民の期待はなかなか満たされず、最大政党であったフィアナ・フォイル (Fianna Fail) 党は批判を浴びた。Terence Brownはこの詩を、戦後期のアイルランドにおける、社会的、文化的絶望感を表すイメージと結び付けている。

4. 移民たち ‘Emigrants’

大飢饉の後も、アイルランドを後にして、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダへと移り住む人々の流れは絶え間なく続いた。詩人の両親たちもこのような移民であった。第二次世界大戦後においても、特に農村部において、移民は顕著に見られ、スラム街とともに、社会問題となっていた。

5. 平和の時の呪文 ‘Incantation in Time of Peace’

Yeatsの‘Meditations in Time of Civil War’の掉尾を飾る詩では、語り手が戦乱の時に対して自分の住む塔の扉を閉ざし、芸術的創造にと自分を振り向けていく。それとは対照的に、この連作の語り手は、「平和の時」と言いながらも、アイルランドの歴史を振り返りながら未来に対してやはり強い不安と絶望を抱かずにはいられない。途切れることのない祈りのような息の長いセンテンスからは強い切迫感が感じ取れるだろう。